

第16話：大神官 酒職人の神 ディオニソス

「『若いゼウス』の意味の豊穡と葡萄酒と酩酊の神。主神ゼウスを父に、人間世界のテーバイの王女セレメを母とする半神半人の存在で生まれた。まだ胎児の時代に、母を失った。伝令神ヘルメスに匿われて、追手のゼウスの正妻の女神ヘラから逃れ、各地を流浪した。娘時代のアフロディテに預けられたこともあるが、アフロディテに、赤ん坊エロスが懐き、疎まれるようになった。自立後、葡萄栽培を身につけ、酒の醸造も手掛けた。自分の神性を認めない者を狂わせ、また動物に化身させるなど、力を発揮し、神として畏怖される存在となった。神にも人にも魔力を持つ酒を携えて世界を巡り、熱狂的信者を持つ。その性格は、時に心ここに在らず、時には弾けて奇怪な行動に走る。母セレメを探しに、冥界に至る。ギリシャ語では『Διόνυσος』（ムネモシュネ）」

流浪の旅人、ケフェウスが立ち去った後、いつしか日もとっぷりと暮れていました。

タロは、インディオ少年が白い牛、パロの背に積んでおいてくれた敷布とティピー一式を降ろし、ティピーを組み立てました。ここならタロとディオの二人が体を休めることができます。一寝入りした後で、ポタポタという音が耳に響き、眼が覚めます。タロは独り言を呟きました。

「雨の音かな？でも昨日は、あんな夕焼けだったのに。」心なしか、甘い香りがティピーに漂ってきました。タロは起き上がり、ティピーの入口の布をそっと持ち上げて外を見ました。ティピーを組み立てたときには気づかなかったのですが、ティピーの風上に、別のティピーの灯りが見えます。まだ眠そうなディオを揺り起こして灯りを頼りに、そのティピーに近づきました。白い牛パロの開けた瞳の中にも灯りが赤く揺れています。その灯りはティピーのなかからのようです。灯りに照らされて、ティピーの布になかの人の影が浮かんでいます。何か作業をしているのか、影が延び縮みして動いています。

「誰が何をしているんだろう？」

タロはティピーに近づき、勇気を出して、ティピーの外から尋ねます。

「僕はタロで、この子はディオ。隣りにあるティピでお世話になってます。怪しい者ではありません。叔父さんですか？叔父さんはどなたで、なにをされていますか？」

ティピのなかの影はゆっくりと身を起こし、ティピの布の隙間をほんの少し開けて、タロとディオを覗きました。隙間から覗く眼は、トパーズのように黄色く光り、夜鍋仕事のせいか、幾分血走って見えます。

タロを一瞥し、ディオに眼を向けるや否や、素早く隙間が閉じられました。でも、こちらを見ていることは、影からわかります。

「ワシは、酒造りのディオニソス。神々が飲む聖なる酒を造っておる。酒造りには、気温が低く安定している夜が最適さ。秋に仕込んだ葡萄の発酵が終わり、丁度、今、酒を絞っているところさ。酒の雫が一滴、一滴と落ちる。これをデルフォイの壺で受け止める。酒造りは、南方の『やし酒造り』の翁から習った。なんと、この酒を飲むと、歳を取らないのさ。これは不老不死の酒さ。酒造りの秘術を知っているのは、神々のなかでこのワシだけさ。さあて君たちは、なぜ旅にでているのかい？」

「僕たちは、月の女神アルテミスの愛獣、ユニコーンを探しています。そしてそうそう、このディオのお母さんも探しています。」タロは、向き直りディオに言います。

「ディオ、叔父さんの名前は、君の名前とよく似ている。叔父さんの顔を拝ませてもらおうよ。なにか心当たりはないかい？」

今までじっとしていたディオは、ティピの裾からティピに潜り込もうとしました。でもディオゲネスは、ティピの隙間を手で締め切り、ディオに眼もくれないばかりか、無口になり、タロ達がいなかったかのように酒造りの仕事に戻りました。タロとディオに見えるのは、ティピごしのディオニソスの後ろ姿だけでした。

暫くして、ディオニソスは独り言のように言うのでした。

「ワシは口下手で陰気だ。でも幼馴染のエロスは明るく陽気だ。ここから西のエロスのところへ行けば、なにかわかるかもしれない。」

ディオニソスは、ティピの隙間からコップを差し出してタロに言いました。

「何かの役に立つかもしれない。大事にしてきたコップ
だけど、タロ、君にあげる。持っていきなさい。」

タロは答えました。「大事にしてきたもの、貰えません。
でも教えてほしいことがあります。叔父さんはなぜ夜も
寝ずに一晩中お酒を作っているんですか？ 沢山作っても
一人で飲みきれないと思います。僕たちが出会った少年
がいた部落で、ポトラッチっていうのかな、大切にして
きた食べ物を出し尽くしてお客さんに大盤振る舞いして
もてなすことがあります。余ったものを出すならわかる
けど、大事なものを皆で分けるって、よくわからない。」
ディオニソスは、ティピの影から答えます。

「お酒は丹精込めて作った大切なもの、ワシの命と同じ
だ。これを神々に飲んで頂く。見返りなど求めはしない。
タロ、君は人にもものを上げることの意味がわかるかい？」
タロは答えます。「欲しそうだから上げます。」

ディオニソスは答えます。

「要らないもの、余ったものを上げることも、もちろん
あるさ。それにも意味がある。そのものが必要な人にも、
もの自身にとってもね。ものに対する礼儀も大切だよね。」

特に、それが食べ物の場合ね。命を頂くのだから。

でも、君にとって何の影響もない。なぜって、要らないし、身に余っているからさ。

一番大切なことは、自分が大事にしているものをほかの人に上げることなのさ。相手が必要としているのなら、自分が大切にしているものを相手に上げること、これが意味あることだ。大切なものが手元からなくなると、身を切られる想いがする。ポトラッチも同じさ。

命は分けられない。でも分け合えるもので自分が大事と思うものを見極め、それを他の人と分け合い、お互いに尊重すること、ワシは素晴らしいと思う。大切なものを失くす悲しみよりも大きな喜びを感じるはずさ。自分にとって何が大事かを知ることって大切だよね。

相手が大事にしているものを大事にしてくれる人って嬉しいよね。お酒も多く人々、神々に楽しんで貰いたい。そして、神々に不老不死になってほしい。それだけさ。」
そう言うと、ディオニソスはティピの奥へと消えました。タロは納得がした気がしました。でも心の中で思います。

(叔父さんは、無口じゃないな。僕の叔父さんみたい。)

「叔父さん、有難うございます。お休み中、ではなくてお仕事中、有難うございました。じゃあこれから、西のエロスさんのところへ行ってきます。」

タロとディオの二人は、自分たちのティピに戻りました。白い牛パロは、二人を見て、あくびをしました。

ディオニソスの夜空の居城は、そう、葡萄酒を飲むためのコップ、コップ座です。

タロは気になって、ズボンのポケットの小さなノートを開くと、十四頁目に文字が書いてあります。

「易経：上卦＝地：下卦＝山：地山謙」

「我を捨て和解しよう：実るほど頭を垂れる稲穂かな」
謙虚に天職に向き合う、職人氣質のディオニソス。

「雨が降って土が湿り気を含む」雨水の始まりです。

それからどうなったでしょう？お話し、続きはまた明日！